

## 金子光晴「南方詩集」における「混血」

金, 雪梅  
九州大学大学院比較社会文化学府博士課程

<https://doi.org/10.15017/16049>

---

出版情報 : Comparatio. 10, pp.29-39, 2006-11-20. Society of Comparative Cultural Studies,  
Graduate School of Social and Cultural Studies, Kyushu University

バージョン :

権利関係 :

## 金子光晴「南方詩集」における「混血」

金 雪梅

はじめに

長い海外放浪から帰国し、戦時下、詩集『鮫』などを発表した金子光晴と東南アジアの関係は紀行文『マレー蘭印紀行』などからうかがうことができる。先行研究の中では『マレー蘭印紀行』の散文的な南洋描写を分析したり、「ほかの追隨を許さない紀行文学の傑作である」と称えたりする論が多い。

本稿ではそれらの先行研究を踏まえ、金子が特にこだわった「混血児／女」というテーマに注目し、一九三〇年代の詩作品、特に詩群「南方詩集」を取り上げ、紀行文との比較を通して、金子にとっての東南アジア体験の意味を考察し、また「混血児／女」というテーマが後の作品や思想にどのように投影しているのかを検討したい。

### 一、金子光晴の東南アジア体験の経緯

金子は東南アジアを二度旅した。第一回目は、一九二九年（昭和四年）六月から十二月までである。第三回目の上海滞在后、妻森三千代とまず香港に渡り、旅行の資金をつくるために一ヶ月滞在してのち、六月シンガポールに到着し、一ヶ月ほど滞在してからジャワに渡る。シンガポールからジャワへの船旅でシンガポールの岬ダンジョン・ガトンに停泊したこと

が、後に金子の代表作とも言える詩「洗面器」創作のきっかけとなった。ジャワ滞在中は、オランダ総督府、広大なボイテンゾルク植物園を見て回り、更にジャワの中部を通って、ボロブドール仏蹟のあるジョクジャガルタにまで足を伸ばし、そこからスラバヤにたどり着いた。続いて、スラバヤでは絵を売って、シンガポールに戻る旅費を作り、シンガポールに戻って妻森三千代を先にパリに送り出した後、一人でマレー半島を旅した。日本人が経営するゴム園が集まるセンブロン河流域を遡上し、ニツパ椰子が茂る「炎の木」の町、バトパハに滞在し、また、クアラルンプール、ペナン島、更にそこから船でマラッカ海峡を渡り、スマトラにまで足を伸ばした。三

二回目は、一九三二年（昭和七年）一月から四月までである。二年余り滞在したヨーロッパは、生活力がなかった上、妻森三千代との葛藤でついにいられなくなり、やっと工面した一人分の旅費で、妻森三千代より先に帰国することになる。十月にマルセイユを出发し、十二月初めにシンガポールに着く。そこから日本へ帰る船便に乗り換えるはずであったが、四ヶ月ほど再びマレー半島を旅し、前回とほぼ同じ場所を回る。結局、妻森三千代よりも遅れて、五月十四日に日本に戻った。このように、金子はあわせて一年近く東南アジアを旅することとなる。

金子が東南アジアを訪れた時期には、そこはすでに三百年もオランダやイギリスの植民地であり、当地の経済は特にスズやゴムなどの生産で支えられていたが、過剰生産と第一次世界大戦後の不況によりゴムなどの価格が暴落し、現地住民の生活は窮乏の極にあった。金子が幾度も彷徨した同地は、当時そういう状況の下にあった。これらの旅を通して、詩人は如何なる感覚を獲得し、如何なる問題意識を見舞われたか、作品にあたって具体的に見ていきたい。

## 二、『マレー蘭印紀行』と『南方詩集』

### 1、『マレー蘭印紀行』と『南進』

金子は一九三二年四月東南アジアから帰国後、東南アジア体験を題材とした作品を次々と雑誌に発表した。敗戦を迎えるまで刊行した単行本は一九三七年八月の詩集『鮫』と、すでに雑誌掲載の短編の紀行文を纏めた一九四〇年十月の『マレー蘭印紀行』<sup>四</sup>の二冊である。

その中で、金子の代表作といわれる詩集『鮫』は、人民社により二〇〇部出版されるが、ほとんど紐を解かないまま、自宅と武田麟太郎宅に山積みにされていたといわれている。それに対して『マレー蘭印紀行』は五刷まで出た。後者がよく読まれた理由は、当時の日本の国内事情にあった。矢野氏の『南進』の系譜<sup>五</sup>によると、明治期に始まる日本の南方関与は、昭和十一年には国策として煽られるようになり、南方関係の図書が次々と出版されるようになった。その中で、売れ行き的好成绩を残した金子の『紀行』はそうした南方ブームの波に乗ったわけである。しかし、その内容および記述の方法は、けつして「国策的知性主義の副産物」<sup>五</sup>とは言えない。というのは、『マレー蘭印紀行』には、専門家として南洋を視察し研究するまなざしは欠けており、林房雄が発した「百年前の志士の夢は百年後の今日においてまさに現実の第一歩を踏み出した。日本の神々はやがて南の島々に降臨し給ふであろう」<sup>六</sup>という発想も見られないからである。

また、雑誌発表の文章を纏めた『マレー蘭印紀行』の記述は旅程の時間順ではなく、往路と復路を記載した内容が混在して、「紀行」として統合性に欠けた、独特のものであった。ほかの作品では多く「僕」や「私」という一人称を登場させる金子は、『マレー蘭印紀行』では「私」という主

体を登場させるのを差し控えている。同時代つまり一九三〇年に出された東南アジア関係の紀行文に比べても、際立った特徴である。先行研究で言われているように、「一九六〇年発行の修道社版世界紀行文学全集の『南アジア編』には、『マレー蘭印紀行』が出た一九四〇年前後の紀行文が多く収められているが、そのどれもが『マレー蘭印紀行』と違った書き方がされている。書き手である「私」がいて訪れた先の「土地」がある。すべてがそのように描かれている。だが、『マレー蘭印紀行』には、「土地」はあるが「私」は存在しないのだ。とりわけその中心をなすマレー紀行には、ほとんど「眼」と「耳」に化し、ひたすら「土地」を映すことに専念しているかに見える金子光晴が存在するだけである」<sup>七</sup>。野村喜和夫は、そうした書き方をされた理由を「対象への注視を詩的に言語化することのなかにそっくり吸収されているから」だと理解し、「そのように捉えたときはじめて、この『マレー蘭印紀行』が金子文学全体のなかに占める位置というものもはつきりするようになるのです」<sup>八</sup>として、『マレー蘭印紀行』は根底から詩集『鮫』を支えているのだ、と結論づけている。

このように、金子の東南アジア題材の作品を考察する際、この紀行文と詩集『鮫』が深く関係づけられ、二つの作品は「表裏をなすものだ」<sup>九</sup>と捉えられている。論者もこの考え方に賛同するが、しかし、それだけでは片付かない問題がある。というのは、金子の東南アジア題材の作品を考察するに当たっては、『マレー蘭印紀行』と『鮫』以外にも注目しなければならぬものがある。次はそれについて具体的に考察していきたい。

### 2、『南方詩集』の位置

加茂弘郎は『マレー蘭印紀行』論<sup>一〇</sup>のなかで、「人民文庫」が『鮫』

の出版広告とともに予告しながら、発表に至らなかった「南洋紀行」に言及して、次のように述べている。「『紀行』の原形と見られる「南洋紀行」が果たしていかなるものであるかは、もはや知る術はない。しかし、「鮫」と同じ出版社から、長詩「鮫」の舞台である東南アジアの旅行記として、ほぼ連続する形で出版が計画、準備されている点でも、「鮫」の、最も近い血を引くものであった事は容易に想像出来る。もしもあの時出版が実現していたら、そして二つを共に手にしていたら、両手の詩と散文は「どのような輝きをみせたのだろうか。」加茂は、同じ東南アジアを題材し、ほぼ同時期に書かれる詩と紀行文を比較する意義を認め、それを実現できなかったことを惜しんでいる。

しかし、加茂の論の中ではその存在を全く触れていないが、金子の東南アジア関与を考える際、もう一つ見落としてはならない重要な詩群がある。それは後に一九四九年に出版された詩集『女たちへのエレジー』に組み入れられた「南方詩集」という詩群である。二三篇の詩から成るこの詩群は、単行本の出版時期だけを見ると『マレー蘭印紀行』よりかなり後のものであるが、しかし、この詩群もまたすでに発表済みの作品を多く含んでいる。二。発表時期を見ると分かるように、これらの詩作品は帰国後の、一九三四年から四一年までの作品である。つまり、『マレー蘭印紀行』の各章の文章と前後して、これらの詩作品は書かれたということになる。

また、この「南方詩集」は、金子にとって大きな課題として残されていた「疎開詩集」問題二とも関わりがある。『こがね蟲——金子光晴研究』第八号には、「金子光晴『疎開詩集』復刻」として、河邨文一郎が一九四三年に東京で写し書きした「熱帯詩集」が全文掲載されている。その目次は次の通りである。

詩集「熱帯詩集」

\* ニッパ椰子の唄 \* 洗面器 \* ボイテンソルフ植物園にて 無題—シンガポールにて 月光不老 旗 \* 馬拉加 マラッカ —シンガポールの羅衛街にて —シンガポールの市場にて 映照 MEMO—作詩のための 街 縁喜(改題)のぞみ \* 無題 \* 牛乳入珈琲に献ぐ 女たちへのエレディ 混血論序詩 ポルブドール佛蹟にて \* おでこのマレー女に 芭蕉 無題 どんげん 雷 エスプラネードの驟雨 子子の唄(目次になし) (\*すでに雑誌発表したもので題目だけの作品)

目次を見ると分かるように、これらは詩人がすでに発表した作品を含めて、詩作品を取捨選択して、詩集を構成するという意図しながらまとめたものである。そして、この「熱帯詩集」とは、つまり戦後、詩集『女たちへのエレジー』に含まれて出版された「南方詩集」と同内容である。「雷」、「エスプラネードの驟雨」を改作した「ジョホール沖にて」、これに「芭蕉」を加えて「雨三題」とし、さらに「感電」一篇を加え、計二三篇の構成となっている。

「熱帯詩集」と名づけて、実現には至らなかったものの、同じ東南アジア題材の詩作品を紀行文『マレー蘭印紀行』と同じように単行文の詩集としてまとめようとした詩人の意図に注目すべきであろう。この「熱帯詩集」に含まれる作品は長詩「鮫」と違い、「混血」という問題意識を滲ませてあるものの、一貫したモチーフがあるとはいえず、スケッチ風に東南アジアを表現したものばかりである。この点から見ても、統合性のない紀行文と比較する価値があると思われる。

### 3、 散文と詩の「姉妹作品」

詩「洗面器」と紀行文「爪哇」の関係について考察してみる。詩「洗面器」では、次のように描かれる。

洗面器の中の／さびしい音よ。 くれてゆく<sup>ツシム</sup>岬<sup>シメ</sup>の／雨の<sup>ツシム</sup>淀泊<sup>シメ</sup>。 ゆれて、／  
傾いて、／疲れたところに／いつまでもはなれぬひびきよ。 人の生のつづくか  
ぎり／耳よ。おぬしは聴くべし。 洗面器の中の／音のさびしさを

洗面器の中に響いているさびしい音を唄った詩であるが、この短い詩の前に、詩そのものより長い前置きが書かれている。「僕は長年のあひだ、洗面器といふつうは、僕たちが顔や手を洗ふのに湯、水を入れるものとはかり思っていた。ところが、爪哇人たちは、それに羊<sup>カシヤ</sup>や、魚<sup>イサナ</sup>や鶏<sup>イカ</sup>や果実などを煮込んだカレー汁をなみなみとたたへて、花咲く合飲木の木陰でお客を待っているし、その同じ洗面器にまたがつて広東の女たちは、嫖客の目の前で不浄をきよめ、しゃぼりしゃぼりとさびしい音を立てて尿をする」。この説明文は簡潔している詩の本文と違って現実的な叙述が綴られているが、詩を理解するには欠かせない重要な部分である。そして、これを念頭におくと、最初の「洗面器の中の／さびしい音」にはただの雨音だけではなく、「しゃぼりしゃぼり」と洗面器の中に尿をする音を想起させる。

一方、紀行文「爪哇」では、シンガポールからジャワ島にいく船旅の様子を描いている。

「まっかにいぶつたコークス火がぎしきしうずまつて、くさい魚をその上で焼い

ている……シンガポール港からダンジョン・カトン（亀ヶ崎）へ、そんな形容の夕立雲が乗りかかってくる。（第六巻 七十四頁）

あるいは、

「夜になるまで雨はそのままふりやまなかった。  
放尿するような淋しい音を立てて、船はすすんだ。」（第六巻 七十五頁）

右の紀行文の引用からも、詩「洗面器」が、シンガポールからジャワ島に向かう船旅と関係があると想定できる。つまり、上海で目の当たりにした、娼婦がまたがつて小便をするのに使った洗面器の印象<sup>三</sup>と、合飲木の木陰で食べた辛いカレーの入れ物としての洗面器の印象とが、船旅の途中で耳にした「放尿するような淋しい」雨音が触媒となって、それぞれが詩人の記憶の中で少しずつずらされ、お互い反響するイメージとして洗面器の発する音に凝縮されるに至っている。こうして洗面器が立てる音のみならず、容器としての洗面器のイメージもやはり微妙に変化しながら互いに照応しているのである。

また、金子が東南アジアで見つけたモチーフの中に熱帯の代表的な植物の「椰子」がある。当地で絵を描いて旅費を工面した金子は、椰子を好んで取り入れた絵を多く残している。詩作品では「ニッパ椰子の唄」（「文学者」一九三九年十一月）、「椰子の祈り」（「むらさき」一九四二年四月）、「椰子」（「婦人公論」一九四二年五月）などがある。中でも「南方詩集」に収めている「ニッパ椰子の唄」が特に代表的なものである。

「赤錆のみずのおもてに／ニッパ椰子が茂る。 満々と張る水は、天とおなじくら

い／高い。むしむしした白雲の映る／ゆるい水壁から出て、／ニツパはかく／爪弾きしあふ。／こころなまつすくな／ニツパよ。／漂泊の友よ。／なみだにぬれた／新鮮な睫毛よ。」(「ニツパ椰子の唄」第一〜四連)

擬人化されたニツパの写実的な描写は、まさに詩人が描いた絵の中の景色と対応している。バトバハ河の岸に生息するこのニツパ椰子を金子は一九三九年に初めてモチーフとして取り上げているが、後に『マレー蘭印紀行』に収められた紀行文「センブロン河」の中でも気になる南方の植物として細かく描いている。「その鋭い葉が、穂先をそろえて二丈あまりも高く天を指さす。とんがりの先にさわって、空がびくびく痛がつている。葉先がかすがにばらばらと言いだしてみたり、あるいは、並んでいる葉のあいだへ、光線の面と、角度とを異にして他の葉の列が影をうつし、重なりあい、また、弾きあうように互にゆずり合う。」(第六卷 十二頁)

詩の中で、「ニツパ椰子」が茂る岸辺の形容に「赤錆」という表現が使われている。その一带は「板橋を架けわたして、川のなかまでのり出しているのは、舟つき場の亭か、廁か。廁の床下へ、網のついたバケツがするすると下ってゆき、川水を汲みあげる。水浴をつかっているらしい、底ぬけたようにその水が、川水のおもてにこぼれる。時には、糞尿がきらめいて落ちる」(第六卷十一頁) というふうには、人間が生活し、排泄物などが海に流される不浄の場所である。そこで高くそびえて生きるニツパ椰子の姿に、詩人は「まつすくな」心を持つ人格を与えている。さらに、

ニツパは／女たちよりやさしい。／たばこをふかしてねそべつて／どんな女たちよりも。ニツパはみな疲れたやうな態度で、／だが、精悍なほど／いきいきとして。／聡明で／すこしの淫らさもなくて、／すさまじいほど清らかな／青い足襟

をそろへて。(「ニツパ椰子の唄」第九、十連)

とあり、ニツパ椰子は骨と肉を獲得し、人格をそなえるだけでなく、「どんな女たちよりも」やさしい女性に変身していく。「すさまじいほど清らかな」「青い足襟」という女性的な表象は『紀行』の中でもその兆しを見ることができるといえる。

「バトバハを出発してバレラハにいたるまで、両岸はみわたすばかり開け、ニツパ椰子が、巨きな權をおし立ててならぶ。それよりほかにない風景である。十一月、雨季満水のころには、ニツパは水のおもてに、ペン先ぐらいの細葉の突先をたてる。だが、乾季には、恥かしいところまでも剥ぎとられ、根まで乾れあがり、ひび入った鉛色の泥中にのずり込んだり、倒れたり……大魚の胸骸に似て半ばそのなかに埋まったりして。ふといやつ根元は肥えふくれて、青磁の大花瓶を抱くようだ。」(第六卷 十二頁)

川の兩岸に椰子が繁茂する風景であるが、乾季にニツパ椰子に起きる変化を描きだす際には、不要とも思われる形容が使われる。椰子の根が剥ぎ取られ露出している部分を「恥かしいところ」と表現する箇所である。「肥え」ている根元を、「抱」かれる「青磁の大花瓶」と形容する所も、やはり女性のイメージを喚起させる。

このように、「南方詩集」は『マレー蘭印紀行』と姉妹をなす作品というところで、ほぼ一体としてあつかう「二」ことが許されると思うが、しかし、詩人として同じ題材を散文と詩という二通りの違った形式に仕立てるにはほかに理由があるに違いない。次に「南方詩集」に見られる「混血」というテーマを検討することでその理由を探りたい。

### 三、「混血女／娘」へのこだわり

金子が「疎開詩集」としてまとめた「熱帯詩集」が戦後「南方詩集」という詩群の形に組まれた時、詩集のタイトルに続き「この詩集を東南亜細亜民族混血児の諸君にささげる」という言葉が添えられている。そして、この献辞通りに、作品の中では東南アジアに生きる様々な混血の人や混血状態の街<sup>五</sup>などが唄われている。それと対照的に、『マレー蘭印紀行』の中ではただ二、三箇所「混血」という言葉が登場してくる。

『マレー蘭印紀行』においては、混血児は、ババ南京、馬來女、広東人と同様、東南アジアの雑多な人間の一種と見なされ、特には注目されているとは言い難い。たとえば、混血児は次のように描写される。「おどり場では、混血女が、ニス色の背すじをだした黒びろうどのドレスの、胸に真っ赤な切花盛り上げ、他の一人は、ちぢれ髪紅い唇、褐の肌に入れ墨しておおまかにうねるからだと純白の襷で蔽って、ゆるやかに床にすべっていた。(中略)福州のパバ南京、(中略)馬來女、(中略)広東人」、あるいは、「出稼ぎ人の海南人苦力、(中略)寧波・福州あたりからわたってきた、蒜と、ひなたくさい臭のたまらない、だが利を見ては抜け目のあに華僑たち。また、それらの異人種の混血児たち」。

しかし、『紀行』の中では、次のような一段がある。

私は、私の航海を、沈落にむかって急いでいるのだとしかおもえなかった。海は、爪哇と、スマトラ島とのあいだの、陸と陸との溝、つなぎよのない間隙であった。眼をつむった海、くらい海は、私たちを、翻弄し、まるで、他人の血液が突如、私の血管に流れはじめ、他人の内臓がこっそりと、私のからだにとりつけられて活動

しはじめたように、急にいきいきが勝ちがいにあって、方角の見当一つつかなかうなってしまったのであった。そのくらやみの蒙昧のなかを、たくさんの島嶼や、燈火もない陸地が流れていった。(爪哇へ)第六巻 七六頁)

船旅で体験している南の海の描写であるが、南の海も島も、詩人の肉體とつながり、詩人の生理と一体化した。そして、「血」という他人と私を区別する要素で表現される。他人の異なる血が「私」に流れ込み、血と血が混ざり合い、「混血」が実現する。しかし、「混血」を意味するこの素朴な表現が金子の作品の中でいかに「混血」というテーマに変貌し、そこに如何なる意味が付与されるかを知るには、「南方詩集」を検討する必要がある。

「二つの人種の和合とは、ほんの言葉のうへで、じつは、恥の結実にすぎぬ」

(詩「混血論序詩」)

ここで暗示されているのは、「混血」は性の悲哀を余儀なく引きずっていることである。「混血」あるいは「混血児」という言葉は、日常の通俗的な使われ方ではややもすると否定的なニュアンスをともなってきた。しかし、混血という表現は必ずしも十分に科学的な吟味の対象として認められてこなかった。科学で問題とされているのは、むしろ「血」によって形成された「人種」という概念のほうである。言語、信仰、文化的習慣、氣質、さらに肉体的な俊敏性や体型といった身体的特徴などは、常に最終的に「人種」という指標によってきれいに分類されている。そして、われわれは「人種」が自然科学的な基準としてはフィクションであることと了解していても、その曖昧な指標によって自己あるいは他人を識別するある基

準を見出そうとしている現状がある。

「……だが、混血児よ。おまへにだけは／かざるものがない。／まつる神がない。  
／そこで、映画俳優のプロマイドを／下宿屋の小卓のうへに立てた。」

（詩「牛乳入珈琲に献ぐ——牛乳入珈琲は黒人と白人の混血児」）

「ヒンズー」、「華僑」、「いぎりす人」、「和蘭人」、「日本人」がそれぞれ祭る「神」がある。つまり、自己を確認する幻想的な基盤——出自や信条や歴史がある。それに対して、「混血児」は「かざるものがない。／まつる神がない」。このように、「混血児」には、自己確認の基盤、従うべき規範やルールともは、すべてなくなっている。

「まじりあえぬ二つの血の相剋の宿命にはインビキサミはあづかりしらない。従つて、二つの民族のどの伝統にも愛執なく、義務もなく、彼女のこころはいつもあかるい。」（詩「子子の唄」）

「混ざる」ことによつて、繰り返し強調されるのはどつちでも属していることではなく、どつちにも属していない、あるいは、何も持っていない、という状況である。

今福龍太は『クレオール主義』一六の中で次のように述べている。「混血」の思想は、まずなによりも、単一の原理にすべてを従わせようとするあらゆる権力にたいして、もつともシンプルで徹底的な抵抗となりうるからだ。（略）なぜなら、混血のテリトリーにおいては、起源の探索はそれほど意味のある作業ではなくなるからだ。混血児は、もはや単一性の反復や、再生産の神話や、オリジナルへの帰還といったパラドキシアルな道程を軽々

と逃れ出て、徹底できにかつ非本質的に、別の存在、別のエンティティへと自らを変容させようとする意志を身にまかせ、未来をめざしてゆく。つまり、人間は自己を確認する基盤を求めると、その出自や信条にいつも縛られている。その中で作り上げているのは、伝統であり、歴史である。しかし、東南アジアの混血児には、最初から自己を確認する回路を閉ざされている。だから、自己の出自を求められない一方で、権力と見なされる父、あるいは伝統、祖国のような束縛からも簡単に逃れるのである。このように、「地図に祖国のない」東南アジアの混血児たちの「気楽さ」は、諸々の対立や束縛から解かれた自由な存在からくるものである。

「君は舐める。／トワンがうました／君の嬰兒を。地球は二つに割れた。／トワンはその向うにいる。君は舐める。／黒い唇で、／あかい舌で。トワンは君を忘れた。／君の嬰兒を忘れた。／頭がちよんぎれたやうな／ひどい物忘れだ。君は舐める。／君の嬰兒を。／トワンの皮膚のつづきを。君は舐める。／カキルマに坐つて／君は舐める。／甘い／甘い／飴のやうに。」（詩「おでこのマレー女」）

詩人はマレーの女が混血児である赤坊をあやす動作を、単調な「舐める」という動作で描写している。「舐める」という動作は微笑ましい愛情表現である。しかし、詩の中で繰り返し強調されているのは父親の側の忘却である。地球の向こう側にある「父」は何もかも「忘れてる」。当然ながら、この母親に舐められている「混血児」は「父はだれてあるか」と問われたとき、「父を知らない」と答えるだろう。この「嬰兒」＝彼・彼女にとつて「父を知ること」は事実不可能である。そして、その不可能の前に立ちつつ、混血児である彼・彼女たちはむしろ意図的に「父を忘却」する方向に向かう。ただいつまでも消えることのないのは「飴のように」舐め

てくれたその触感であろう。そして、その触感で繋がっているのは「黒い唇」、「あかい舌」をしている「母」である。

こうして母である「女たち」が東南アジアの主役になり、さらに「混血児」も「女・娘」に収斂していく。さらに次の詩句のように、本来無性であるはずの「混血」たちは、金子の作品では性が付与され、常に「女」として登場する。

「一輪花を手にして、含羞んでいる混血女。」（詩「映照」）

「インピキサミは、ヒンズー・タミールとおらんだのまじった混血娘。二種のちがつた血の流れは、まじりきれず、彼女のからだのすみずみでたたかふ。」

（詩「子子の唄」）

#### 四、詩「月光不老」を読み直す

詩「月光不老」は、このような「混血女／娘」の系譜に沿ったものとして読み直すことができる。さらに詩集「南方詩集」を理解する上にもその必要性がある。

月光不老

鮫は砲轟とともに走り、

鮫は虚落に簇がる。

大洋は、鮫ののどよりくらい。

牙も、歯も、それに植えるよすががない。

大洋は、臓腑がない。がらんどうのそのひやつこい思想のなかで鮫は成長した。

……その鮫どもが 今夜も大洋のうへに腹をかへして  
月のあかん坊になつて戯れる。

この詩を解説するとは、すなわち、そこに登場する「鮫」、「大洋」、「月」が何を表しているかを考えることである。まず、「大洋」は「鮫」のいるところであり、その特徴は「くらい」「ひやつこい思想」を持っている。さらにその「大洋」は「がらんどう」で「ひやつこい思想」を持っている。「鮫」は「走り」、「簇がる」、「成長」する、「戯れる」という動詞で表現され、活動的な生き物として能動的に描かれている。

自身あるいは人間一般の象徴として「おつとせい」や「くらげ」などを頻用している詩人であるから、ここでも、「鮫」を詩人自身と考えるならば、「大洋」は当然、詩人がその最中で生きていく社会や世間のことで、詩人にとって現実の社会は「くらい」ものであり、あるべき「臓腑」もなく貧弱で、不完全なものである。そのような現実のなかで「鮫」である詩人は、強靱でもなく、「牙も、歯も」ない無力さを自覚した存在として描かれている。

このように、先行研究では「現世は海のようにがらんどうで暗い。しかし、永遠の月光のさす晩などは、鮫は赤ん坊のように嬉々として戯れながら生長してきた。と言ひ、彼の虚無感が、そこらへんの場当たりの二ヒリズムとは違う所以を、この詩は、物語るうとしてしている」<sup>17</sup>、あるいは、「鮫」は現実の中に「虚落」を見出し、その虚落に心惹かれるけれども、戦争は忌避して、一身の安全をはかろうとする、きわめてヒューマンな金子自身、

及びそれと同類の人たちをあらわしている「ハ」といった解釈などが行われている。しかし、そうした解釈では、「月光不老」という詩のタイトルの意味も、なぜ「東南アジア民族混血児の諸君にささげる」ための詩集の中にわざわざこの一篇が置かれたのかも、はつきりしないままである。

この詩を解説する上で大きなキーポイントの一つとなるのは「不老」の意味を帯びている「月」であると思われる。月は様々な意味合いを喚起するが、田中清太郎はその答を西洋に求め、「ギリシア・ローマ神話においては、月の女神は純潔の守護神である」と述べる一方、「月のあかん坊」というのは、どうもおかしいようである」と、その解釈の矛盾を自ら認めている。「題名の「月光不老」は、芸術（詩）は長し、の意味での「不老」であるか、さもなければ、人間というものの存在する限り、愛は永遠に新鮮であるということを言っているのである」と最後はまとめているが、強引の印象は免れない。

ここで「月」を解く鍵を西洋に求めるのは遠すぎる。金子は漢文を好み、学校の教科書だけでは物足りず、『三国志』、『十八史略』から入って、『史記』、『書経』、『戦国策』、『春秋左氏伝』という風に手当たりしだいに読んでいた経緯を自伝のなかで繰り返し述べている。『山海経』、『水経注』や『江南子』、荘子などを渉猟して得た中国の古典に関する造詣の深さは、晩年の評論や随筆などからもうかがえることができる。

詩のタイトル「月光不老」を解説するには、まず連想されるのは、日本にも伝わった中国の伝説ではないだろうか。『淮南子』に、次のような話が見える。弓の名人である羿は十個あった太陽のうち九個を射落とした英雄で、西王母から不死の薬を貰うが、彼の妻である嫦娥がその薬を盗み飲み、仙女となって月に逃れてしまうという話である。この伝説においては、陰である月と女性のイメージが重ね合わせられ、そこで奔月の人と

して嫦娥という女性にしたのであり、また月が不死の象徴とされるのは、欠けてはまたみちて己むことのないさまから連想されたのであろう。たとえば『楚辞』天問に「夜光何の徳ある、死すれば則ちまた育（い）く」とある。また、宋代の『後山叢談』には、地上の兎はすべて雌で、月の兎は逆に雄ばかりだから、地上の雌兎は月光をあびて妊娠するという俗説が収録されている。旧暦の八月十五夜に空が曇ると、月光に照らされない兎や貝は身ごもらず、また稲も実らないという<sup>二〇</sup>。

これらをヒントから考えると、この詩の中では、月光を浴びせることで実、あるいは子をはぐくむことができるイメージと、月の満ち欠けによる不死不滅が重なり、父を知らずに生まれる生命を暗示しているのではないか。

そうすると、この詩の主人公である「鮫」はどう解釈できるだろうか。鮫は、鱧とも書き、金子の作品の中でも重要なモチーフの一つである。長詩「鮫」により、鮫は近代文明と帝国主義の象徴、あるいは、その恫喝者、警告者という紋切型の意味合いを付与されている。しかし、ここでは漢字の語源からアプローチすることで、この詩における「鮫」の意味がもつとも明快になる。「鮫」という漢字は魚が交わると書く。魚類の多くは交尾しないのに対して、鮫は交尾する数少ない魚類である。また「鱧」も、魚が養うと記し、胎生のものが多いというさめの生殖の特徴を生かした漢字である。しかも詩の中で「その鮫どもが 今夜も……」という複数形を使っている。従来、鮫を第一人称の人間と考えるより、第三人称である「混血女／娘」と見るほうが適当である。つまり、ここでの「鮫」は女である「混血女／娘」となるのである。

こうして、羊水で充滿している子宮をそなえ、そこで生命を育む母、つまり女たちの身体が、同様な液体の水で充滿していて、「暗い」海のイメ

ージのなかにみごとに透視される。交わることによって悲哀を背負うことになる「混血女／娘」は、母の「暗い」子宮の中で「成長」していく。東南アジアの「混血女／娘」はもはや父を必要としない。そして、彼女たちもまた、月の下で更なる生命をはぐくむだろう。

金子においては、すべての「混血」の系譜が、「母／女」へとつながる道をそろって歩み出す。意図的に「父を忘却する」ことを通して、混血児たちは「母／女」の存在を起点とした新しい模索をするのである。金子はこのことを散文ではなく、詩に凝縮して提示しているのではないだろうか。

## 五、金子の「混血」という発想

後に金子は次のような言葉を述べている。

「僕が夢をみていることは、第一に、国家が解消し、従って権力者の支配がなくなることで、地上に白人も、有色人種もいなくなって、まったく混血して、出生や伝統の誇りも持たなくなることで」（「人間のいない世界」）

「世界に平和の来る時があるとしたら、人類が混血して一つになったあとかもしれない。」（「黒人楽土」）

戦後になってから綴った文章であるが、金子は、三十年代の東南アジア体験で得た「混血」の発想を、その後も保持していたことがうかがえる。具体的に後期の詩作品のなかでどのような形で反映しているかは、新たな考察が必要であるが、混血ることによって、純一、正統というもの、つまり権力と対抗できる形態に詩人は可能性を見ていることは確認できると

思う。戦中戦後において、支配的な権力にまつ向から挑み、自らの詩業を打ち立てる金子にとって、中国及び東南アジアのうるさいほどの混濁的空氣の記憶が大きな作用を果たしていたにちがいないだろう。

## 注

一 鈴村和成『金子光晴、ランボオと会う——マレー・ジャワ紀行』弘文堂二〇〇三年七月

二 四度という説もあり、その場合は、第一回渡欧の際の航路で、シンガポールを二度通過したことを数えている。「シンガポール、コロンボの南方の風景は、まったく僕の心をとらえた。そして、もう一度、ゆつくり、東南アジアをへめぐってみたいものだとおもった」（第六巻 一三八頁）。

三 「尿のたまってる木／散歩してる木」「おもしろ鎖でつながれてる木／ぬかるみでもがいてる木」（「ポイテンゾルク植物園にて」）。ポイテンゾルク植物園では熱帯の湿った環境に伸びている巨大な植物が擬人化されている。金子は気味の悪いこれらの奇妙な植物を通して、南方を見ていた。またポロブドール仏蹟では、「人間のコッピイにすぎぬ／柔らかなほとけよ」「千年前の姿態で／ふくらんでる君達の胸は、／なにおもふ。」（「ポロブドール佛蹟にて」）と、一人の旅人として、雑多な周囲には無関心で、しかも必死で互いにかかりあっている石仏に尋ねている。このように後の詩作品でその旅の足跡を辿ることができる。

四 『マレー蘭印紀行』全十九章のうち十二章はそれ以前に発表されたものであり、その初出は次の通りである。

- 「スマトラ島」『改造』一九三一年四月
- 「馬來の感傷」『セルバン』一九三二年八月
- 「ねこどりの目」『詩集』一九三二年十月
- 「センプロン河」『ヌウヴェル』一九三二年十二月
- 「馬來ゴム園開墾」『作品』一九三四年一月
- 「夜」『詩作』一九三六年五月
- 「爪哇へ」『世代』一九三六年六月
- 「鉄（一）」『歷程』一九三六年十月
- 「鉄（二）」『歷程』一九三六年十一月
- 「世界放浪記——馬來の巻一」『改造』一九三八年四月

「霧のブアサ——ジョホールバトバハにて」(『新亜細亜』一九三九年九月)

「蝙蝠——ばたびや舊港のおもひで話」(『文芸』一九三九年九月)

五 矢野暢『南進』の系譜』中央公論社 一九七五年十月 一六七頁

六 林房雄『毎日新聞』一九四三年八月十六日

七 原満三寿編『新潮日本文学アルバム・金子光晴』新潮社一九九四年二月 九八頁

八 野村喜和夫『金子光晴を読もう』未來社 二〇〇四年七月 五一頁

九 原満三寿『椰子と鮫のグラフィティ』(『こがね蟲——金子光晴研究』第十号一九九六年三月)

一〇 加茂弘郎氏『マレー蘭印紀行』論』(『こがね蟲——金子光晴研究』第二号一九八八年三月)

一一 『南方詩集』の目次、及び既発表作品の初出時の題名、初出雑誌は以下の通りである。

ニッパ椰子の唄(『文学者』一九三九年十一月一日) 洗面器(『人民文庫』一九三七年十月) ボイテンゾルフ植物園にて 無題——シンガポールにて(『文芸』一九四六年四月一日) 月光不老——シンガポールの羅衛街にて 旗(『鶴第一輯』一九三四年四月) 馬拉加(『鶴第一輯』一九三四年四月)——シンガポールの市場で(無題——新星坡市場にて) 日本学芸新聞一九三七年四月) 映照(『新女苑』一九三七年八月) Memo 街(『人民文庫』一九三七年十二月) 縁起(『縁喜』『若草』一九三八年一月) 牛乳入珈琲に献ぐ——牛乳入珈琲は黒人と白人の混血児 混血論序詩(『文芸』一九三九年六月一日) 女たちへのエレジー(『女たちへのエレジー』『詩作』一九三八年一月) ボルブドール佛蹟にて おでこのマレ

ー女(『歷程』一九四一年七月十日) どんげん 雨三題 無題 感電 子どもの唄

二一九四二年七月『中央公論』に詩「海」を発表したのを最後に、戦時下の特別高等警察や憲兵による監視と検閲のために、金子は詩を発表する場をほとんど失った。

そのため、金子はそれまでに書きためた詩稿とすでに雑誌に発表した作品を取捨選択し、詩集の構成を考えながら戦火や言論弾圧から守るよう、写本を作らせ地方へ「疎開」させた。それは「疎開詩集」と通称されている。当時、詩集の「疎開」を頼まれた河邨文一郎はその詳細を「金子光晴『疎開詩集』について」(『こがね蟲——金子光晴研究』第八号)、「体験的金子光晴抵抗詩論」(『こがね蟲——金子光晴研究』第四号)で詳しく述べている。河邨の証言によると、このような「疎開」は二回行われ、もう一人長崎の版画家田川憲も「疎開詩集」を写し書きしたという。

『こがね蟲——金子光晴研究』第八号の「金子光晴『疎開詩集』復刻」には一回目の「真珠湾」(一九四一年三月)と二回目の「熱帯詩集」(一九四三年十一月)が全文掲載されている。

三 この詩の成立について、詩人は次のように語っている。「あの詩にある小便するところはね、あれはなかなか複雑なんです。洗面器の中に小便するのを始めて見たのは、その時の上海でなんです。それから、今度は帰りのシンガポールのスラングー・ロードというところで、ヒンズ・キリン族が赤いサロンをはき、上にシャツを着て、赤いトルコ帽を被つてるのをみた。あれはだいたいタミール族ですよ。あれが往來にテーブルを出して、その上にリノリウムみたいなものを敷いてこっちのほうに洗面器が三つぐらいあって、一つは魚、一つは羊、一つは果物、そう三種類くらいを盛り合わせてあってね、それを人に食わせるんですよ。こいつが目の玉が飛び出すほど辛い。あれは殺人的な辛さですよ。まあ、そのときのヒンズ・キリン族の洗面器とずいぶん前に見た上海の女の洗面器への小便、これを結びつけて、その時の自分の境遇、そんなものみなと一緒にした発想、それはあの詩になったわけです。」(第六巻 三二九頁)。説明文の中で詩人は、「洗面器にまたがって広東の女たち……」と述べているが、引用部分から分かるように「洗面器の中に小便をするのを初めて見たのは、その時の上海」、つまり一九二〇年代に三回訪れた上海においてである。

四 原満三寿『椰子と鮫のグラフィティ』(『こがね蟲——金子光晴研究』第十号一九九六年三月)

五 『南方詩集』には「街」という詩がある。シンガポールの混血状態の町を歌っている。

六 今福龍太『クレオール主義』青土社一九九四年十一月 一〇八頁

七 村野四郎編『金子光晴詩集』旺文社文庫 六二頁

八 田中清太郎『金子光晴の詩を読む』国文社 一九八二年十二月 一六四〜一六五頁

九 「譬若羿請不死之藥於西王母、姮娥竊以奔月、悵然有喪、無以統之。何則不知不死之藥所由生也。是故乞火不若取火燧、寄汲不若鑿井」(『淮南子』卷六覽冥訓 明治書院 一九七九年八月 三二七〜三二八頁)

二〇 「中秋陰暗天下如中秋無月則兔不孕、蚌不胎蕎麥不実兔望月而孕蚌望月而胎蕎麥得月而秀世言兔皆雌惟月兔雄爾故望月而孕」(陳師道『後山叢書』台北廣文書局 一九六九年九月 八七〜八八頁)

\* 本文中の金子光晴の引用は、初出を明記しているもの以外は、中央公論社版『金子光晴全集』全巻(一九七五年十月〜一九七七年一月)に拠った。